

天狗界

靈界に於る特殊存在として天狗界と龍神界とがあるからかいてみよう。

先づ天狗界とは、各地の山嶽地帯の靈界にあつて、天狗なるものはそれぞれ山の守護としての役を掌つてゐる。天狗界にも上中下の階級があり、主宰神としては鞍馬山に鎮座します猿田彦命である。天狗には人天及び鳥天の二種があり、人天とは人間の靈であつて、現世に於る学者、文士、弁護士、教育家、神官、僧侶、昔は武士、等で死後天狗界に入るのである。又鳥天とは鳥の靈で、鳥は死後悉く天狗界に入り、人天の命に従つて活動するのである。

鳥天の中、鷲や鷹のやうな猛鳥は、天狗界に於ても非常な偉力を發揮してゐる。以前私は小田原の道了権現の本尊が或婦人に憑依したのを審神した事があったが、それは何千年前の巨大な鷲であつて、鷲の語る所によると「昔は大いに活躍したが、近年扁翼を傷め、思ふやうに活動が出来ぬ。」と歎声を漏してゐた。

烏天狗は勿論烏の靈で、天狗界では主に神的行事を行ひ、特に神聖なる階級とされてゐる。又木ッ葉天狗といはれるものは小鳥の靈で通信、伝令や使者の役目をしてゐる。

昔から天狗は鼻高と唱へ、絵画や面など非常に鼻を高く表はしてゐるが、之は事實である。又赤い顔になつてゐるが、天狗は酒が好きだからである。

次に天狗の生活であるが、彼等が最も好む行事としては議論を闘はす事で、それは論戦に勝てば地位が向上するからである。從而現世に於て代議士、弁護士等の業務に携はる者は天狗の再生又は天狗の憑靈者である。議論の次に好むものは碁将棋で、私は天狗から天狗界の将棋を教はった事があるが、現界のそれとは余程違つてゐる。又書画、詩文等も好むが何といつても飲酒は彼等にとつて無上の樂しみである。天狗界の言葉は現界の言語とは余程異り、サシスセソの音が主で、その長短抑揚の変化によつて意志を交換するのである。天狗の語る所を見ると口唇を最も動かし、舌端を尖らせ、音声

は殆んど出さず、上下の口唇を盛んに活動させて意志を交換するので見てゐると面白いものである。

又天狗の空中飛翔は独特のもので、よく子供などを拉し、空中飛翔によつて遠方へ連れ行く事がある。彼の平田篤胤の名著「寅吉物語」中の寅吉の空中飛翔は、奇抜極まるものであり、又秋葉神社の三尺坊天狗の事蹟も面白い記録である。天狗は人に憑依する事を好み、人を驚かす事を得意とする。彼の牛若丸が五条の橋上で弁慶を翻弄したり、義経となつてから壇の浦合戦の時、船から船へ飛鳥の如く乗り移つたといふ事蹟なども全く天狗の憑依したもので、彼が鞍馬山に於て修業の際、猿田彦命より優秀なる天狗を守護神として与へられたものであらう。其他武芸者などが山嶽に籠り修業の結果、天狗飛切の術などを得たり、宮本武蔵の転身の早業などは何れも天狗の憑依によるのである。

次に修験者などが山へ籠り、断食、水行等の荒行をなし、神通力又は治病力など種々の靈力を得るといふ話がよくあるが、それ等も天

狗の憑依である。斯ういふ天狗は一種の野心を持ち、その人間を傀儡として現世に於て名誉又は物質を得て大いに時めく事を望むのであるが、之等は正しい意味の神憑りではないから、一時は相当の通力を表はし社会に喧伝せらるゝ事もあるが、時を経るに従ひ通力が鈍り、元の木阿弥となるものである。そうして人間が断食や病氣等によって身心共に衰弱する場合、霊は憑り易くなるのである。

又眼に一丁字ない者が突如として神憑りとなり、詩文や書など達筆に書くといふ例なども天狗の憑依である。

天狗の霊に就て私の体験をかいてみよう。以前私は武州の三峰山に登った事がある。其夜山頂の寺院に一泊したが、翌朝祝詞奏上の際私に憑った霊があるので訊いてみると、二百年位前天狗界に入った霊で、駿河国三保神社の神官であつたそうである。何故私に憑依したかと訊くと、其頃私が愛読してゐた或宗教のお筆先があつたが、其を読んで貰ひたいと言ふのである。そこで私は出来るだけ読んでやったが、約半年位居て彼は厚く礼を叙べ帰山したのであつた。天

狗の性格は理屈っぽく慢心をしたがり、下座が嫌ひで、人の上に立つ事を好み、言ひ出した事は飽迄通したが、人の話を聞くより自分の話を聞かせようとしたがるものである。又鳥天の憑依者は鳥の特色を表はしており、口が尖り声は鳥の如き単調音で性質は柔順で争を好まないから人に好かれる。又空中飛翔の夢を見る人がよくあるが、之は鳥天の憑依者である。